

家事遂行の変化へ向けた選択肢の理解

—日常生活においても参照可能な知見の構築へ—

Understanding choices in performing family work: Towards knowledge building for individual life
滑田明暢

Nameda, Akinobu

立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構

Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University

Key words: 家事, 変化と維持, 複線径路・等至性モデル

目的

現代の日本では、男女共同参画社会を目指しながらも、「男は仕事、女は家庭」の性別役割分業が依然として維持されているといえる(総務省, 2011)。この現状を受けて、男性の家事育児参加の規定因を探る研究がこれまでも行われており、それらの研究では、時間的余裕がある場合に家事育児に参加することが示されている(松田, 2006)。一方で、男性の家事育児参加の規定因を探る研究には大規模質問紙調査が行われる場合が多く、個人が日常生活において参照できる知見を十分に蓄積できているとはいえない。本研究は家事に焦点を絞り、人生のいつどのようなときに、夫婦それぞれの家事への参画の仕方が変化するかを記述し、変化へ向けて個人が取り得る選択肢を理解することを目的とする。

方法

パートナーと家事を実施している50代あるいは60代の夫婦3組と個人5名(うち女性5名)を協力者とする半構造化インタビューを分析の題材として用いた。各インタビューでは、家事/就労/育児/介護などの生活に必要な仕事をパートナーとどのように実施してきたかを尋ねた。具体的には、いつどのようなときに、誰が、どの仕事を、どの程度担っているのか、遂行の仕方に大きな変化はあったか、遂行の仕方はどのように決めたか、決まったか、話し合いはあったかどうかについて尋ねた。

分析においては、いつ、誰が、どの程度どの家事を担っていたかなど、語りのなかから家事遂行に関わる具体的な記述を抽出し、内容の重なる記述をグルーピングしてラベルづけしたものを時間軸に並べて整理した。時間軸に並べる際には、複線径路等至性モデル(Trajectory Equifinality model; TEM)(安田・サトウ, 2012)を援用した。

結果と考察

家事への参画の仕方に大きな変化があったのは、夫が転職あるいは定年退職を迎えた時期であった。そのため、本研究では、定年退職前後の変化について検討した。定年退職後の維持と変化の過程を図1に示す。

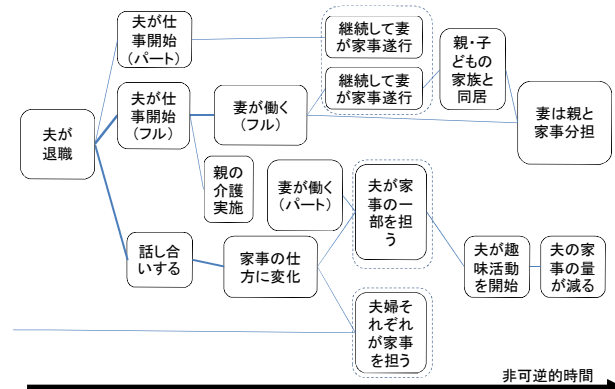


図1 定年退職後の生活に必要な仕事の遂行方法の維持と変化(点線部分が等至点: 家事の遂行方法の維持と変化)

定年退職後の家事遂行の維持と変化の形態は大きく分けて1) 継続して妻が主に家事を遂行する形態、2) 妻が主に家事を遂行するが夫が家事の一部を遂行する形態、3) 夫婦のそれぞれが家事を遂行する形態の3つであった。一方では、夫が家事の一部を遂行するようになる、あるいは夫婦それぞれが家事を遂行するようになる前には、夫婦での話し合いによる意見交換と調整が行われていた。他方では、話し合いがなくとも、変化があった場合が確認された。話し合いがない変化の場合には、時間的余裕ができたことが、変化を促していたと考えられる。

総合考察

時間的余裕以外には、話し合いを経て家事遂行に変化が起こっていた。今後は、個人が取り得る選択肢を示す知見として、話し合いによる調整の過程を明らかにすることが展望される。

引用文献

- 松田茂樹(2006). 近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化 季刊家計経済研究, 71, 45-54.
総務省(2011). 平成23年社会生活基本調査 総務省統計局
安田裕子・サトウタツヤ(編著)(2012). TEMでわかる 人生の径路—質的研究の新展開 誠信書房.